

中国西部における工業化時代の労働者の 老後生活と特徴

LIU Lu

1960年代に、中国は10年ほど持続したベビーブームを体験した。その後、中国政府は「一人っ子政策」を実施してきた。中国国勢調査のデータによると、2000年以降、沿海地域都市部と比べて、西部地域、特に甘粛省の若者労働力の流出の比率が高くなっている。中国西部地域の高齢化が急速に進んでいくとともに、第1代の「一人っ子」たちの親が高齢化を迎えつつあると言えるだろう。中国では、「家庭養老」など伝統的な考え方は当然のことと考えられる一方で、子供が親を扶養することができない現実に直面している。

中国での「高齢化」や「一人暮らし」の問題は地域によって事情が異なる。中国西部には「三線建設」という独自の時代がある。本論文では、「三線建設」時代に中国西部・甘粛省平涼市に建設された国営機械会社のA社宅団地と1990年代以降に建設された鉄道建築国営会社のB社宅団地に生活している高齢者の生活現状と養老意識に関する調査を踏まえ、中国の西部における工業化時代の労働者の老後生活の特徴を示した。

第1章では、中国西部における工業化が1949年から現時点までを区分した。「第一段階発展時期」、「基礎を固める時期」、「強固調整時期」、「追い付き追い越す時期」という4つの段階を紹介する。黄(2001)によれば、「三線建設」が「初期発展期(1964年6月-1968年)」、「全面的展開期(1969年-1972年)」、「収縮強固期(1973年-1978年)」の3つの時期に分けられている。「三線建設」時期の資料とデータによると、その時期の中国西部地域、特に三線地域の工業化率が高くなり、鉄道など交通のインフラも建設し、次の発展の基礎が作られ、人々の生活レベルも高めていたが、資金と建築資源、人材の浪費などの問題も大量に残っていた。また、国防・軍備の充実、工業化の高速的成長、「三線人の精神」の助長・次世代の継承など積極的な影響があった一方で、人材・資源の浪費、工業、更に経済の成長性がなく、また、「三線建設」に貢献した知識人と労働者たちの老後生活の保障ができていない、など消極的な影響が残ってい

る。

この角度から、「三線人」を対象としての本研究の重要性を述べた。

第2章では、中国北西地域の甘肅省平涼市崆峒区の地域位置、自然と文化資源、地域経済、人口構成、養老政策の変遷とその高齢者問題、等の角度から、調査地を選定する理由と意義を説明した。また、養老保険補助金に関する政策を中心に、甘肅省の養老政策をまとめ、2010年から2016年の甘肅省人力資源和社会保障庁より実行された基本養老金に関する政策では、年齢、技術資格を特徴とした養老保険金の対象者がはっきり分けられていることを説明した。特に、「4050人員」や「五七工」と「家属工」が養老保険金の特別な対象とされたが、「三線人」を対象とする個別の政策が足りない状況を明らかにした。

本研究では質問紙聞き取り(アンケート)調査と生活史聞き取り調査の2回の調査を行った。そして第3章では、調査社宅団地、また2回の調査のそれぞれの調査時点及び期間、調査対象と人数、調査内容と目的を説明した。

第4、5章では、具体的な調査を行った。第一に、第4章の質問紙聞き取り調査(アンケート調査)の結果から見ると、A社宅団地の女性回答者は他者の交流が多かったが、A、B、2つの社宅団地とも男性の孤立状況がある。第二に、A社宅団地の回答者は収入が少ないが、今の生活と社会への満足度が高い傾向となった。第三に、A社宅団地の65歳以上の女性高齢者には、老後生活は自分で自立して生活していくと回答した人が多かったが、男性回答者には、配偶者に世話してもらいたいと回答した人が多かった。第四に、A社宅団地の回答者が介護についての情報の入手が困難だと答えていた。1次調査の結果を踏まえて、第5章に生活史聞き取り調査を行った。結果としては、A社宅団地の「三線人」が「自立性」、「仲間意識」、「出身地回帰意識」が強かった。または収入の格差も大きかった。「社会に貢献したい」意識が強く、老後になって「三線人」、特に女性「三線人」が自分の居場所を探しにくい人があることも明らかになった。

それに対して、国家養老保険システムの地域の適用範囲を拡大して「三線人」を物質的保障し、「三線人」の「老後の生きがい作り」も重要だと筆者は考えるに至った。

中国の政府はこれからの養老について、東南沿岸部には在宅養老、社区養老、施設養老、養老モードが多様に整備しつつあるが、それらの整備が遅れている中国西部地域では、伝統的な「家庭養老」に依存し、「施設養老」を拒否する高齢者も依然として多い。このような状態を変えていくには、高齢者施設に関する情報を広告やマスコミなど宣伝を強めることだけでなく、施設見学、定期的に専門職員によるセミナーを実施するなど、養老に関する情報の宣伝の多様化を進めたほうがいいのではないかと考えるに至った。今の北西地域の高齢者は養老問題をまだ強く実感しておらず、これから高齢化が加速していくにつれて、老後生活を迎える人々が、どのよう

2016 年度社会学研究科修士論文タイトル及び要旨

に「家庭養老」から「施設養老」と「社区養老」へと養老観念の転換をしていくのか、また養老問題の直面にどう心構えをすればよいのか、課題になっている。